「みっける365日」展 ── アーティストと探す「人生の1%」

会期:2018年2月24日(土)〜3月18日(日)　会場:生活工房ギャラリー／ワークショップルームAB

サポート・アーティスト:北川貴好 青山悟 キュンチョメ タノタイガ

出展者:〈北川貴好ゼミ〉荒木有紀 市川徹 Take 服部実 松井つるみ　〈青山悟ゼミ〉あやこ 大岡川漣 大つかあゆ 金子千裕 曽我高明 百日紅
〈キュンチョメゼミ〉石田和基 石田健祐 笠島久美子 雲に乗ってみたいのんちゃん 凡 マツモトノリヒト　〈タノタイガゼミ〉おいらいお オッチ 河村ゆうこ ムラカミ 山田千穂

主催:公益財団法人せたがや文化財団 生活工房　企画制作:みっける写真道場!!

みっける365日展

MIKKERU 365DAYS: EXHIBITION

「みっける」とは?

切り取りたいものごととの関係性をつくろうとする、能動的な行為のこと。これまで各地で展開してきた「みっける写真道場!!」は、一日歩いた街の風景を約1,000枚撮影し、高速スライドショーにして即日発表する活動です。そうした写真の連なりによる映像は、能動的に何かを「みっける」ことで現れた思考や意志を映し出しています。その手法で、これまでテーマや場所ごとに「みっける○○」と題して2011年より展開し、ワークショップやフェスティバル、展覧会を開催してきました。今回の「みっける365日」は1日ではなく、1年。つまり人生の1%以上を能動的に動き、おもしろくみっけるアクション! を積み重ねていくプロジェクトです。

アーティストと探す『人生の1%』

撮って、繋いだ、だれかの1年。

365日の写真を撮りためて、なにかを「みっける」ワークショップの成果発表展。それはだれかの「人生80年における1%」を、世界にシェアする現場でもあります。

今回4組のサポート・アーティスト(北川貴好・青山悟・キュンチョメ・タノタイガ)が、大学のゼミ形式で年間を通じて制作を指導。ゼミごとに活動や解釈を重ねつつ、参加者それぞれの関心に依拠するディレクションを果たしました。

「世田谷」というキーワードに紐づけられた、色とりどりな参加者たち。そのパーソナルな365日がいま、表現となって本会場を埋め尽くします。

バラエティ豊かな22人の大量の写真を使った高速スライドショーと派生して生まれた作品群が、違うだれかの「人生の1%」と交錯していくダイナミズム。お楽しみください!

プロジェクトの流れ

2016年

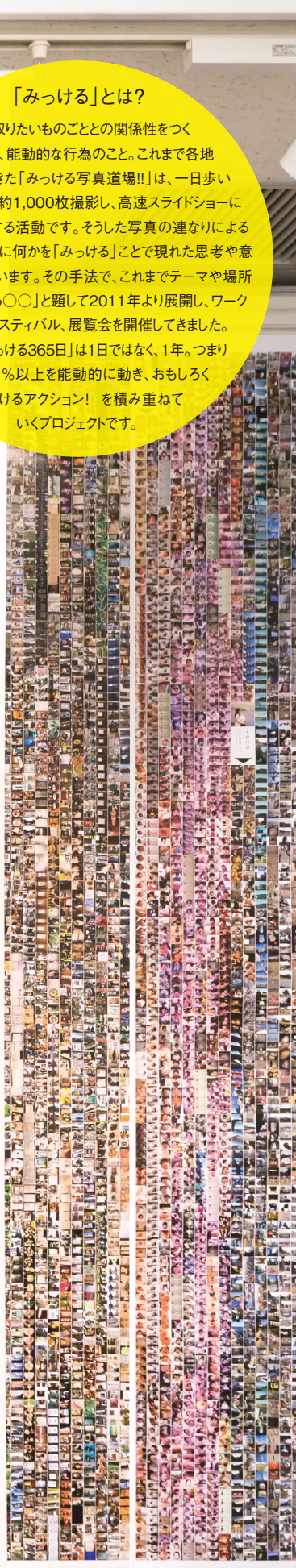
- 12月23日、27日 「みっける365日」参加者募集説明会!
  - 参加をお考えの方に、プロジェクト内容についてアーティストが説明します。

2017年

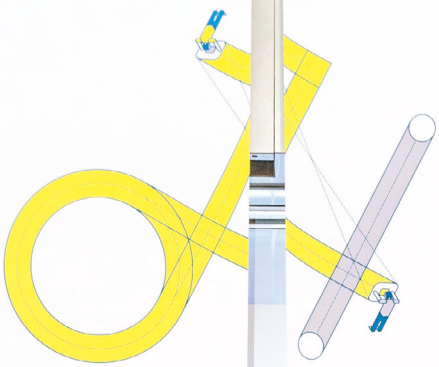
- 1月1日 撮影開始!
  - この日から365日の間に撮影した写真が作品になります。
- 1月、3月、5月、8月、10月 365日をみっける!
  - アーティストと一緒に365日のテーマを深める、楽しいワークショップや中間発表を行います。

2018年

- 1~2月 作品制作!
  - 2017年に撮影したすべての写真をもとに高速スライドショーや作品を制作します。
- 2月24日~3月18日 「みっける365日」展覧会!
  - 365日の活動成果をアーティストと一緒に展覧会で発表します。



ごあいさつ



「人生80年とすれば1%」以上にもなる365日――。

2017年開催のワークショップ「みっける365日」は、4組のサポート・アーティスト（北川貴好・青山悟・キュンチョメ・タノタイガ）が、多彩な背景を持つ参加者らの制作をゼミ形式でサポートしました。この度、生活工房では、この1年間の成果を発表する展覧会を開催いたします。

本展では、22名の一般参加者が1年間で撮りためた写真を高速スライドショーにして発表します。SNSにはアップしきれないような膨大な写真が会場を埋め尽くすとともに、さらに派生して生まれた作品も展示します。ある視点やこだわりに貫かれた22名の作品群は、日々の暮らしに潜むクリエイティビティを私たちに気づかせることでしょう。

撮って、繋いだ、だれかの1年間。もしかすると、あなたが過ごした365日も、だれかが撮ったどこかの写真と繋がっているかもしれません。22名による365日分の写真が交錯する本展で、「人生の1%」を探す旅をお楽しみいただけると幸いです。

最後になりましたが、本展の開催にあたりご協力・ご尽力いただいた関係各位に厚く御礼を申し上げます。

―――― 公益財団法人せたがや文化財団　生活工房

街の記録から、人生1%の表現へ

「みっける365日」が始まった2017年は、生活工房が開館20年を迎えた節目の年でもある。初年度の1997年に開催した「三軒茶屋〜まち・人・商い〜」は、写真家によるワークショップを経て、一般参加者が撮影した再開発中の風景を通して、街が抱える問題点を提起する写真展だった。2018年に開催した「みっける365日展」も、当時と同じく一般参加者らの写真をもとにしている。しかし、本企画は被写体に関する制限はなく、副題の通り「人生の1%」で何を見つけるのかが主題だ。アーティストと1年を過ごし、参加者それぞれが表現者となり迎えた本展は、個々人が抱える困難や喜びを共有する現場でもあり、また来場者の創造性を触発する展覧会でもある。街の記録から人生1%の表現へ。さらにこれからの20年がどのように記憶されるのか、楽しみにしたい。

佐藤史治（生活工房プログラムコーディネーター）

1日の遊びから始まった「アーティストと探す人生の1%」

―――「みっける写真道場!!」師範　北川貴好

パソコンに溜まった写真をさくっと見返せるようにするため、1000枚くらいのデータを1つの動画ファイル（＝高速スライドショー）にしてみたら、無意識に映像的な表現として撮影している箇所をたくさん発見しました。そこで、自宅の周辺で1日かけ1000枚を目標に街並みを撮影する実験をしてみました。高速スライドショーにしてみると、自分が何に興味を持ってその時間を過ごしたのか読みとれて面白い。また普段見逃している被写体を積極的に探していることにも気づき、結果的に街と遊んでいるようでした。

この遊びをいろんな人とやろう思い、「（30秒に一回）みっける写真道場!!」を2011年に発足。1日約1000枚を目標に撮影、即動画にし、発表しあうこの形式の道場を約30箇所でおこなってきました。

発足から3年半後の2014年。年末の宴会芸として、はじめて1年分の写真を全て使ったライブ・プレゼンテーションを披露。1日でなく、1年の活動を振り返る遊びですが、一方で溜まったデータの整理という「みっける」の原点回帰となっていることに気づきました。そこから展開し開催した「みっける日常ヨコハマ」展（2016）では、4組のアーティストが写真の提供をしてくれる人を探し、撮影済みの1年分の写真を全て使って作品にしました。アーティストが他人の写真を作品化したことで、人生の一部を俯瞰的に覗き見るような展示になりました。

今回の「みっける365日」は、参加者とアーティストとが一年間撮影するものや活動を一緒に考えます。そうして溜めてきた写真を元に、撮影者自身が作品を発表します。他人の人生を覗き見するのではなく、1年間という時間を意識しながら共に過ごし、作品にすることで「人生の1%」に輪郭を与えようとする試みです。

ところで「みっける」には基本のルールがあります。それは、「削除入れ替え編集なしの高速スライドショー」というものです。しかし今回は、サポート・アーティストの裁量を大きくして、ルールは弱めに設定しています。あえて書くなら、こんな内容です。

「みっける365日」の

掟（おきて）

一、参加者はゼミのように班で分かれ、担当するサポート・アーティストと共に1年間をたのしく過ごすこと

一、1年間、参加者は撮影すること

一、1年間の写真をもとにした作品が面白くなるように、アーティストは参加者をサポートして展覧会を開くこと

今回、選定したサポート・アーティストは、1年を楽しく過ごしつつ、最後はシビアに展覧会を作り上げていただけそうな方にお願いしました。最後に、「みっける写真道場!!」師範の視点で、彼らを紹介します。

青山悟　2012年の青森でのアーティスト・レジデンスで3ヶ月を一緒に過ごす。北川が毎日作っていたみっける式の日記映像、その音作りに遊びで参加。初期の頃から「みっける」のそばにいる。現代美術のマーケットも、アート・プロジェクトも、両方横断できるアーティスト。

タノタイガ　2012年のみっけるフェスから始まり、2014年と2016年を含めて三回の大きな「みっける」の展覧会やプロジェクトに参加。そのときの三部作は、みっける道場史の名作となっている。北川には真似できない、人と人との付き合い方なども心得たアーティスト。

キュンチョメ　「みっける」とのコラボレーションは初めて。日常の中で、ハッキングされるような瞬間を待ち続けるアーティストのような印象で、絶妙な二人の掛け合いとともに、参加者の「これぞ！」という動きの瞬間をうまくサポートしてくれそうなアーティスト。

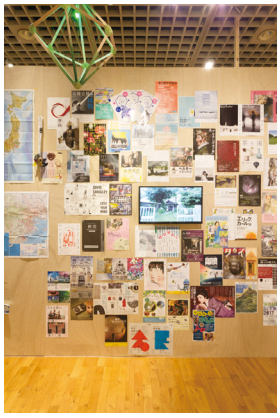
以上、北川を含めたサポート・アーティスト4組が制作した各ゼミの紹介映像は3階で上映、ディレクションした参加者22名の作品は4階で展示しています。ぜひアーティストと見つけた人生の1%を楽しんでください。

ご出産直後に参加。1年間の赤ちゃんの姿をスライドショー。数ヵ月ごとの赤ちゃんの重さを体感できるぬいぐるみと、成長が伝わるシルエットを壁面にドローイング。

あやこ(ママ):成長 -誕生からの365日-

大岡川漣(作品と鑑賞者をつなぐナビゲーター):Hello, world!

美術館ボランティアを行う作者は、展覧会に紐づく書籍や場所に関心を寄せる。自身が1年間で心に留めた展覧会関連物に、実際に会いに行った旅の様子をスライドショー化。膨大なチラシとマッピングも壁面に。



大つかあゆ(小さい会社員):収集壁

日々の生活の中からは見落とされがちな、意図せず構成されている幾何学的な美を、作者の視点で1年間追い求めていったスライドショー。展示では、実際の柱と布を用い、配管の構成美をミニマルに表現。

青山 悟ゼミ

AOYAMA SEMINAR

一人一人がアーティスト

現代美術の基礎を学ぶ
通年授業をもとに、個々の1年間を
アーティスティックに表現!

ゼミ生ひとりひとりが「作家としての自覚と責任を持って1年間を過ごすこと」をテーマにしました。自身の表現に責任を持つということは、他者を意識することと同義です。

出展者

あやこ (ママ)
成長 - 誕生からの 365 日 -

大岡川漣 (作品と鑑賞者をつなぐナビゲーター)
美術館をあそぶ

大つかあゆ (小さい会社員)
収集壁

金子千裕 (写真家)
ある主婦が写真家になるまで

曽我高明 (現代美術製作所)
世田谷さんぽ

百日紅 (会社員)
思いがけず鳥と遭遇したい

サポートアーティスト

青山 悟

あおやま・さとる(美術家)古い工業用ミシンを用いながら、時代により変容し続ける労働の意味や、機械と人間の営みとの関係性などについて問い続けている。横浜トリエンナーレ2017「島と星座とガラパゴス」に参加。

武蔵野美術大学通信部に通いつつ描く、鳥の暖かさを感じさせるドローイングと絵本。日常写真のスライドショーでは、鳥のモチーフを目に留めている生活風景が流れる。

百日紅(会社員):思いがけず鳥と遭遇したい

自身ラストとなる東京生活の拠点・世田谷を散歩した記録とマップ、および終止符を打った東京生活の記録本を展示。壁面サイズの世田谷マップは、来場者も書き込めた。

曽我高明(現代美術製作所):世田谷さんぽ

1年分の膨大な就職活動の書類に、母からの絵手紙、パートナーや友人の写真を同居させた展示。スライドショーには、遷移していく状況と作者の心境が映し出される。

金子千裕(写真家):ある主婦が写真家になるまで

読書会発起人として活動し、ファシリテーターでもある作者が、昨年心に留めた書籍との出会いについて文章化し、書影とともに壁面びっしりと展示。読書会も開催。

服部実(読書会発起人):Book Documentation Room 2017

世田谷におけるまちづくり活動を見える化させるため、GPS移動記録1年分を大きくマッピング。関わる資料や制作物も同時に配置。会期中は部屋内のこたつにて執務した。

市川徹(株式会社世田谷社代表取締役):世田谷社分室

一年間イギリスやハワイの旅行、美術鑑賞やイベントなどに行きながら、様々なネタを考えて写真を撮影した。クスッと笑えるショートネタの映像とともに、出演した小物たちを展示ケースに並べる。

荒木有紀(会社員):有紀の部屋

北川貴好ゼミ

KITAGAWA SEMINAR

ミッケルシェア 365北川荘

シェアハウスを模した二つの空間で
映像とインスタレーションを結び、
1年を解題する!!

シェアハウス北川荘。今日は年に一度オープンハウス。共同キッチンでは、一年間の住人たちの考えたことを発表。各個室では、1年の活動で生まれたもので部屋を飾り付け!!(北川貴好)

出展者

荒木有紀 (会社員)
自分を含めてキャラ

市川 徹 (株式会社世田谷社代表取締役)
「まちづくり」の見える化チャレンジ

Take (会社員)
自分にとっての驚異の部屋

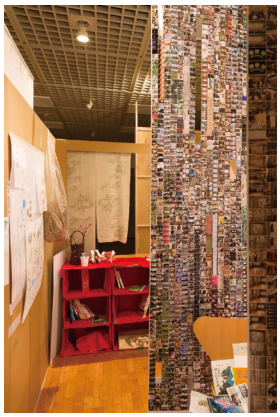
服部 実 (読書会発起人)
人×本×写真

松井つるみ (江戸東京野菜コンシェルジュ)
たね・種・胤のご縁さがし

「みっける写真道場!!」師範/サポートアーティスト

北川貴好

きたがわ・たかよし(美術家)建築的なアプローチで、空間そのものに手を加えあるいは、風景を再感覚するような作品を制作している。一方、2011年デジカメの写真を使った町遊び「30秒に一回みっける写真道場!!」を開始。



松井つるみ(江戸東京野菜コンシェルジュ):育つ胤(タネ)の部屋

江戸野菜や着物リメイク等の日常活動を会場においても展開し、部屋および北川荘の裏路地でゲリライベント。シート化された写真群は重要箇所をコの字に折り曲げ、ウラ面側に関連資料の貼付やメモを構成した。

Take(会社員):自分にとっての驚異の部屋

方解石は平行四辺形に割れる。割れた先にも多数の平行四辺形があり、まるで部屋の集積のようだ。部屋を集めた塊が、人生かもしれない。1年収集した石や趣味の品を、ロケーションカードと共に塊状に配置。

「1年の活動を発表する」会場という見立てで5名がプレゼンテーション。大スクリーンの高速スライドショーと同時進行で、小さなまな板に本人らの語りを投影した。

シェアハウス北川荘 共同キッチン

富士登山をモチーフに撮影するも8合目で高山病となり、断念。鉱物に囲まれた富士山で、祖父が遺した石庭を回想。石碑の無い皇居に、祖父の石の欠片を置く旅に出る。

石田和基（会社員）：石碑と旅する男

道端の人に1年声を掛け続け、撮影成功した人物写真を高速スライドショー化。設置カメラのシャッターを押すと動画が静止、撮影交渉の音声とインタビューが流れ出す。

石田健祐（AD/風船屋）：風と声

おじいちゃん愛に溢れる作者が「1日1おじいちゃん」を撮影したスライドショー。おじいちゃんの体内水分量＝50%にあたるスライムを制作、おじいちゃんの定義を試行。

笠島久美子（美術家）：1日1おじいさん／じいさんのボケ正月

キュンチョメゼミ
KYUNCHOME SEMINAR

みっけた！ ヴァイブス・トリッパーズ!!

巨大物や建物の隙間を使った
インスタレーション。
6人のアクティビティを掘り下げる♥

テーマは「トリップアドバイザーでどうかな？」とゼミ生に聞いたところ、「トリップはするけどアドバイスはしない」と即答でした。己の為に己の欲望を活性化させる彼等のヴァイブスをご覧あれ。（キュンチョメ）

出展者

石田和基（会社員）
石碑

石田健祐（AD/風船屋）
風景をつくり出している人々

笠島久美子（美術家）
おじいちゃんについて

雲に乗ってみたいのんちゃん（アルバイト）
珍しい美しいを探したら、
時間を追っていた

凡（美術家）
～写真樹～

マツモトノリヒト（会社員）
芸術家の視点

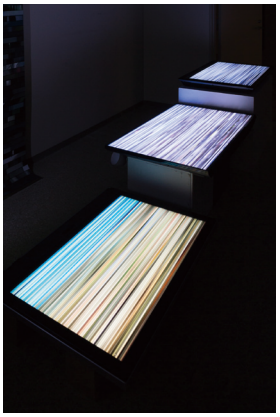
サポートアーティスト

キュンチョメ

（アートユニット）2011年から活動している男女のアートユニット。メンバーはホンマエリとナブチ。「生きるために活げること」に関わる作品を制作。シリアスな現場に詩的な行動やユーモアをもって介入していく。第17回岡本太郎現代芸術賞受賞。

凡（美術家）：
記憶の樹 ～過去～未来～

365本のアルミ線をより合わせて制作された大きな樹木。365本の根の先には、1年間に撮影された写真が1枚ずつ突き刺さっている。地の底なる根を「過去」として、上空へ向かう木の枝を「未来」として表現した。



マツモトノリヒト（会社員）：
De la droit

毎朝同ルート、同時刻を歩くサラリーマンの作者は、自身の軌跡を地層的と着想し、出勤時の身体の右側を撮影。水平90分割された像は上から4月から12月の同時刻映像で、ぼんやりと通勤時の風景が立ち上がる。

1月2日に1-2のプレートを発見したことから、1年分みっけた日付を集めた写真作品「日付シリーズ」、日付の在りかのメモ、気になるものを定点撮影した作品など多数。

雲に乗ってみたいのんちゃん（アルバイト）：日付シリーズ

玄関から足を踏み入れると、靴箱の上に並べられた小物と壁に重なるように1年間自分の足を撮影し続けた作品が投影される。靴や歩く地面の表情は軽妙に変化していく。

❶ムラカミ（わらじをたくさんはいている）：どこゆく・てくてくあし・あすに

リビングルームに置かれたテレビからは、道端に落ちているものなどを見つけて撮影した写真が流れる。ヘッドホンからは解説や友人との軽妙な突っ込みなどが聞こえる。

❷おいらいお（ことばらんどの学芸員）：バグズライフ

進行形で撮影されていく我が子の写真と、過去へ遡る我が子の写真と記憶。映像と展示の関係性を示すように、パソコンが置かれた仕事机の横にはキッズスペースを配置。

❸山田千穂（見守り業）：タイムTV

タノタイガゼミ
TANOTAIGA SEMINAR

マナザシレゾナンス

部屋という構成要素に
5人それぞれの年間テーマが同居する。
タノタイガとみんなの家 !!

ゼミ生たちが365日をかけて見つめたそれぞれの眼差しを、「部屋」に見立てた白い一つの空間に構成しました。（タノタイガ）

出展者

おいらいお（ことばらんどの学芸員）
『バグズライフ』

オッチ（市民活動コーディネーター）
ジョーさんと私

河村ゆうこ（イラストレーター／補修屋）
ふと目にとまるもの

ムラカミ（わらじをたくさんはいている）
どこゆく・てくてくあし・あすに

山田千穂（見守り業）
タイムＴＶ

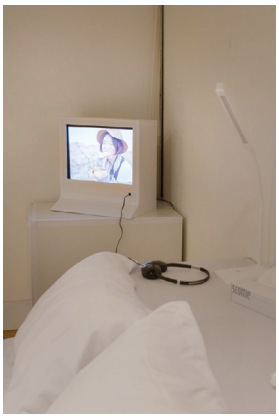
サポートアーティスト

タノタイガ

（美術家）多様な表現手法によって記号性と媒体性を跨ぎした風刺的表現を行う。ときには作者自身を媒体化し、日常に埋もれた社会や集団の倫理性、ルールやシステムを表出させ、作品の中にはユーモアと毒を兼ね備える。

ある日、ベランダで見つけた蝉の死骸。風雨にさらされながら時間と共に風化し、いつしか消える。その時間に併行して作者の日常風景がカーテンの向こうに投影される。

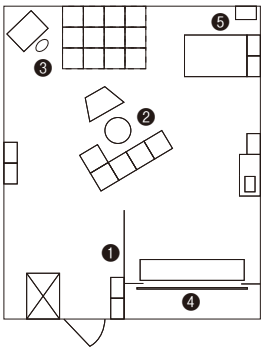
❹河村ゆうこ（イラストレーター／補修屋）：ふと目がとまるもの



❺オッチ
（市民活動コーディネーター）：
ジョーさんと私

恋人によって撮影された作者自身の1年間の記録。ダブルベッド脇に置かれた映像を見ている観客は、恋人の眼差しを体感することとなる。結果として、付き合い始めから入籍に至る時間を垣間見ることができる。

タノタイガゼミ案内図
❶ entrance
❷ livingroom
❸ desk & kids space
❹ balcony
❺ bedroom



青山悟ゼミ
「一人一人がアーティスト」

北川貴好ゼミ
「ミッケルシェア365北川荘」

キュンチョメゼミ
「みっけた! ヴァイブス・トリッパーズ!!」

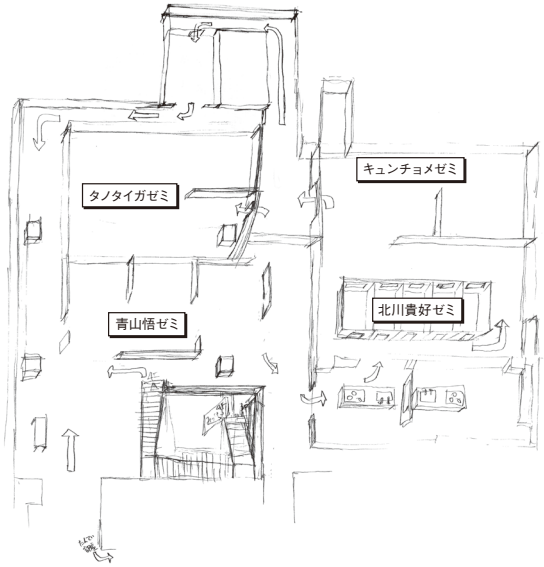
タノタイガゼミ
「マナザシレゾナンス」

3階生活工房ギャラリー
参加者22人の365日全写真を集めた壁面

街並みとしての「みっける365日展会場」

北川貴好（美術家/みっける写真道場!! 師範）

22人の参加者と4組のサポート・アーティストは、1年にわたって写真をいかに撮影し、いかに作品として落とし込むか議論を重ねてきました。参加者やサポート・アーティストの性格から、必然的にゼミ毎の展示ディレクションが生まれ、4つの部屋それぞれが見事に違う空間や時間の見せ方になりました。青山悟ゼミはアートフェアのような壁面空間。北川貴好ゼミは個室の集合体。キュンチョメゼミは空間の隙間に作品を展開。そして、タノタイガゼミはワンルームの白い部屋に作品が共存。それぞれが所属しているゼミというコミュニティーの空間によって、参加者の人生1%の見え方も変わってくるのだと思いました。今回の作品群は、意図的に作品化されたモノではありません。日常的にデジタルカメラやスマートフォンの中で膨大に溜め込まれた写真が、ゼミの中での対話から必然的に吐き出されていったモノです。つまり、現実空間に吐き出されないデジタルな日常の積み重ねが、その垣根を超え現実の作品として展示空間に現れたのです。街並みは日常の営みの積み重ねから現れてくるものだとすれば、これらの光景こそがいまある生活コミュニティーの新しい街並みであり、4組のサポート・アーティストはそれを見出した新しい「アーキテクト」だったのだと思います。



「みっける365日」展イベント

オープニング・イベント:
「みっける」って、なんなん?
日時:2月24日（土） 14:00〜15:30
講師:北川貴好、石田喜美（教育学者）ほか

タノタイガのマイル塾inみっける365
あなたは今日何マイル手にいれましたか?
日時:2月25日（日） 13:00〜15:00
講師:タノタイガ

キュンチョメのダークツーリズムガイド
日時:2月25日（日） 19:00〜20:30
講師:キュンチョメ

北川貴好プレゼンツ
占い師とめぐる全体講評会
日時:3月3日（土） 19:00〜20:30
講師:北川貴好、大塚ひさよ（占い師）、森田幸江（みっける探偵）

青山悟×小金沢智トークイベント
世田谷／目黒から語るアートの現在
日時:3月4日（日） 14:00〜15:30
講師:青山悟、小金沢智（太田市美術館・図書館学芸員）

この他、ゼミ生の企画によるワークショップやレクチャー、公開制作等も多数開催しました。

みっける探偵事務所

ゼミ活動に潜入し、公式ブログ「みっける探偵FILE」を執筆したライター森田幸江のインスタレーション。1年分の膨大な写真と録音、事情聴取（インタビュー）を基に、美術と思しき証拠をプロファイル。依頼人・キタガワタカヨシ宛の調査報告をつづった探偵事務所を空間構成。

森田幸江（みっける探偵）
その本業は、重箱のすみほど深掘りしていく文化系ライター／編集者。
「みっける探偵FILE」
http://www.setagaya-ldc.net/blog/list/c=19/

「みっける」的想像力の地平 —— 石田喜美

「みっける365日—アーティストと探す『人生の1%』」。その成果を一言で表すとすれば、「みっける」的想像力の現時点でのレンジを、一望して見せたことにあるだろう。たとえば、「みっける探偵」こと森田幸江は、本プロジェクトで展開された各ゼミの様子を、「北川貴好ゼミ—追加的」「青山悟ゼミ—魔法的」「キュンチョメゼミ—二次元的」「タノタイガゼミ—求心的」と表現した。[*1]

北川貴好ゼミ《ミッケルシェア365北川荘》は、共有スペースで展示される写真の高速スライドショーと、シェアハウスのような建築物の中で展開されるそれぞれの部屋のインスタレーションとキッチン内に設置されたシアターによって、等身大の「365日」に迫る。シアターで投影されるリアルな粗っぽさを持つ写真群と、その前方のまな板に投影された本人像のたどたどしい語り口は、気づかなければ見過ごしてしまうような、平板な日常そのものである。北川は、そんな等身大の「365日」のリアルを肯定しつつ、《ミッケルシェア365北川荘》という仕掛けを「付加」することで平板な日常を異化し、ざらつきのある異様で奇妙な集合空間として提示する。

タノタイガゼミ《マナザシレゾナンス》は、真っ白に塗られたプライベート・ルームの象徴的な場所に、参加者による写真の高速スライドショーが展示される。まるで、真っ白な部屋それ自体に展示される写真群も、タノタイガひとりの作品であるかのような錯覚を覚える。「求心的」の言葉どおり、全ての参加者の写真がタノの「求心」力によって引き込まれ、タノタイガ・ワールドの渦の中に溶け込んでいる。

「誤解されているけれど、本当は、美術には正解が『ある』」[*1]と断言したという青山[*2]。青山はゼミでの活動のさまざまな局面で、「正解」にたどりつくための「魔法」を見せていったという[*1]。そんな青山ゼミの参加者たちの作品群には、それぞれが見出したある種の「正解」—目指すべき作品や展示の姿—と、日常にかけられた「魔法」の姿が浮かび上がる。

キュンチョメゼミ《みっけた! ヴァイヴス・トリッパーズ!!》では、自身の表現と対峙し続ける中で湧き上がってくる欲望に焦点が当てられる。Skypeを用いたゼミの様子が、「遠距離恋愛」にのめり込む恋人たちを想起させたことから「二次元的」と評されたキュンチョメゼミ。「二次元的」な遠距離恋愛が、手の届かない相手への欲望と妄想をかきたて、それが狂気へと至ることがあるように、キュンチョメゼミの参加者たちは、まだ見ぬ、自分自身の「表現」の姿を欲望する。キュンチョメゼミの参加者が提示しているのは、そんな欲望そのものなのだ。

「みっける」が向かおうとするその先にあるのは、暴力的なまでに平板化した日常に対する創造的反抗なのか、あるいは、日常に埋没した芸術的表現への欲望の発掘なのかはわからない。いずれにせよ、「みっける」が、我々の「日常」なるものに対し、反旗を翻そうとしていることは事実である。

石田喜美
横浜国立大学教育学部准教授。専門は、メディア・リテラシー教育。腐女子コミュニティから、水戸芸術館「高校生ウィーク」まで、子ども・若者の活動がはじまる場のありかたに着目し、さまざまな研究・実践を行っている。

*1 森田幸江(2017)「みっける探偵FILE〈その3〉—— 美術の現場を採取せよ《上巻》」(2017年7月19日) http://www.setagaya-ldc.net/blog/222
*2 森田幸江(2017)「みっける探偵FILE〈その1〉—— 美術の現場を調査せよ!」(2017年3月3日) http://www.setagaya-ldc.net/blog/218

「みっける365日」展
アーティストと探す「人生の1%」

会 期
2018年2月24日(土)〜
3月18日(日) 11:00〜19:00
月曜休館／入場無料

会 場
生活工房ギャラリー／
ワークショップルームAB

主 催
公益財団法人せたがや文化財団
生活工房

企画制作
みっける写真道場!!

後 援
世田谷区
世田谷区教育委員会

サポート・アーティスト
北川貴好 青山悟
キュンチョメ タノタイガ

出展者
〈北川貴好ゼミ〉荒木有紀 市川徹
Take 服部実 松井つるみ
〈青山悟ゼミ〉あやこ 大岡川漣
大つかあゆ 金子千裕
曽我高明 百日紅
〈キュンチョメゼミ〉石田和基
石田健祐 笠島久美子
雲に乗ってみたいのんちゃん
凡 マツモトノリヒト
〈タノタイガゼミ〉おいらいお オッチ
河村ゆうこ ムラカミ 山田千穂

会場施工
ヒロセガイ 北條元康 櫻井駿介
栗原汐里 新藤君平

宣伝美術・会場グラフィック
キタダデザイン

「みっける365日」展
ブックレット

編 集
北川貴好 佐藤史治

撮 影
大洲大作

テキスト
北川貴好 佐藤史治
森田幸江 石田喜美

発行／発行元
2018年3月／生活工房

〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
03-5432-1543
http://www.setagaya-ldc.net

本誌の無断転写、複製、転載を禁じます。
©Setagaya Arts Foundation
Lifestyle Design Center
2017-2018

世田谷文化生活情報センター
生活工房
Lifestyle Design Center